

第15回(2022年)「昭和女子大学女性文化研究賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究賞選考委員会

1. 選考経過および選考結果

2022年に発行された著作を対象とする第15回「昭和女子大学女性文化研究賞」の選考対象は、13点であった。

第1次選考は、学内選考委員により、2023年2月8日、3月3日に行われ、第1次選考基準に沿って、単著2点が候補作として選出された。

第2次選考には、学外選考委員である東北大学名誉教授 辻村みよ子氏のご参加、また、内閣府男女共同参画局長 岡田恵子氏からの委任状と所見により、4月14日に最終選考を行った。

協議の結果、佐藤 文香氏『女性兵士という難問：ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』（慶應義塾大学出版会、2022年7月20日発行）に第15回(2022年)「昭和女子大学女性文化研究賞」を贈呈することを決定した。

*参考：第1次選考基準（2008年度、第1回本賞選考時に、選考の目安として確認された）

- 1)単著を優先する。
- 2)テーマが「女性文化研究賞」の趣旨に合い、明確かつ有意義である。
- 3)研究方法、分析視角が優れている。
- 4)著作の独創性と体系性。
- 5)結論、提言の明瞭さ。
- 6)叙述の成熟性

2. 受賞作の選考理由

佐藤文香氏は、1972年生まれ、慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科を経て、2002年慶應義塾大学で博士（学術）を取得された。2002年には、第6回女性学研究国際奨賞を受賞された。「はじめに」にも書かれているように、この頃から、戦争・軍隊を批判的に解剖するという研究に「ジェンダーから問う」という視座を貫いてこられたことが、今回の受賞作品である『女性兵士という難問』を産み出したといえる。

受賞作は、2004年に著された『軍事組織とジェンダー：自衛隊の女性たち』から17年を経た待望の続編として刊行され、ジェンダーの視点から戦争・軍隊の社会学という難問の問い直しをしているのである。

第15回の女性文化研究賞の選考にあたって、選考委員や研究所は大きな「難問」を突き付けられた。そのため、選考にあたって、決定までの議論に長い時間を要したことをここで申し上げておく必要がある。

女性兵士をめぐる問題は、多くの国で、徴兵制や軍隊への女性の平等の是非を問うことで、

フェミニズムの分断を引き起こしていた。日本でも、男女共同参画・女性活躍・積極的平和主義の流れの中で、自衛隊への女性の参画が進められてきた。これをめぐっては、本質論的な立場に立つフェミニズムからの批判とともに、リベラルなフェミニズムの動向に対して、多くの疑問が提起されている現実がある。自衛隊を含め軍隊への女性の参画が、その男性性や暴力性をカモフラージュするために利用され、女性を二級市民化するという本質自体は不変であると考えられるからである。

フェミニズム界に衝撃を与えた2004年のご著者は、フェミニストからの評価が高かった一方で、バッシングにも直面されてきた。その環境下で論文を積み重ねて、次の著書を著されたことは、大変な勇気があることであったと同時に、前進し続けるという著者の宣言であると受け止める。確かに、本著は、2006年から2020年までに学会誌や共著書に収録された14本の論考と書き下ろし原稿1本からなっているが、このテーマに対する世界情勢の進展を踏まえた上での単著として読むことができる。世界的にみて、リベラリズム・フェミニズム界を分断し、その限界を論じてきたことが、難問であったことは言うまでもない。前著から17年間の間に批判を受けながら、どこが難問であるかを示すことに、躊躇しつつもおひとりで取り組み、発信を続けてきた姿勢と奮闘も含めて、また、日本社会に突き付けられた問題として、応援しなければならないという結論に至ったのが、今回の受賞の決定となった所以である。

前著から17年を経ているにも関わらず、女性兵士の問題がイデオロギー的な面での反論や、自衛隊を軍隊としてとらえるという点で批判されることだけに終始しがちなままであったことは、世界のアカデミズムの社会から取り残されているかのように思われる。女性兵士の問題にジェンダーという切り口からの挑戦状を突き付けていることこそ、日本での女性兵士の議論がこれまで十分でなかったことを示しているのかもしれない。

女性兵士をめぐる問題は、フェミニズム理論だけでなく、日本における平和主義や自衛隊の在り方から、男女共同参画・女性活躍の政策課題の根源に関わる点で政策的な課題でもあり、今後の男女共同参画推進にとっても無視しえない問題である。

とりわけ、選考委員会の中で、本質的な問いと格闘する著者の姿勢や分析についての評価が、世界の国際関係学会や政治学会の動向を視野に入れた時、今後ますます重要な課題であり、受賞者のこれからの理論的な貢献が引き続き期待されるのである。

(報告：志摩園子 学内選考委員)